

JA全農ウィークリー WEEKLY

5面

全国初 広島県に地元JAと全農が 共同運営する直売所オープン (広島県本部)

2面

600号発行 (耕種総合対策部)

営農情報誌『グリーンレポート』

(2面) 令和元年6月号で600号となった
営農情報誌「グリーンレポート」



(2面) 全農が協賛する全農親子農業体験ツアー
や料理教室などの様子を発信する「食農
応援」ツイッター(3面)

全農広報部 食農応援 @s... · 2019/05/26 ·
JA全農親子農業体験ツアーin JAほこた

ほこたでもサツマイモを植えました
みなさん、収穫が楽しみです!!

#農業体験 #親子体験 #親子イベント #茨城
県 #全農 #ほこた



開店と同時に多くのお客さままでにぎわう地元JAと全農が共同運営する直売所「とれたて元気市 となりの農家店」(5面)

- 2 岩手、宮城のマラソン大会で
焼き餅配布(米穀部)
- 3 全自動で空中散布するドローンに
高い関心(福岡県本部)
- 「食農応援」、「田んぼの生きもの調査」
ツイッター開始(広報・調査部)
- 4 労働力支援、共同購入トラクターを
農業白書で紹介(大分県本部、耕種資材部)
- 6 JAズームイン(JA秋田なまはげ)
- 7 青果情勢(園芸部)

8 神奈川県産農産物使ったようかん
5種新発売(神奈川県部)

JAタウンショップ紹介
蔵王酪農センター(宮城県)

Web版JA全農ウィークリーは
こちらから



<https://www.zennoh-weekly.jp/>

Web
限定

ラジオ番組「あぐりずむWEEKEND」で
全国の農業高校生を紹介(広報・調査部)

おむすび大キャンペーンin香港
(広報・調査部)

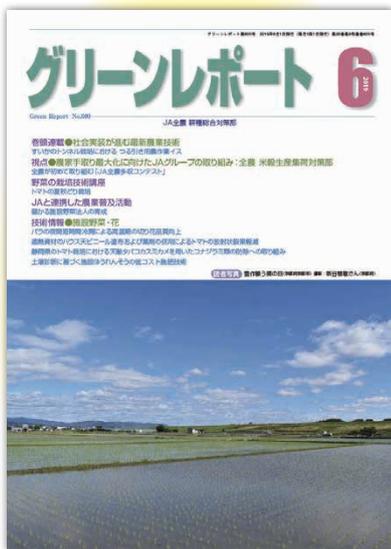
ゴルフツアー初優勝の原英莉花選手に
国産農産物贈呈(広報・調査部)



営農情報誌『グリーンレポート』600号発行

農業生産と農業経営に役立つ情報発信を目指して

耕種総合対策部



令和元年6月号で600号となった『グリーンレポート』

『グリーンレポート』は創刊当初、肥料や農業の施肥・防除関連の記事が主体でしたが、その後、読者の要望にお応えし、農業情勢や生産技術・資材、生産現場の活動など、総合的な営農情報誌に発展してきました。現在は毎月7万2500部発行し、そのうち7割以上に当たる5万5000部が担い手農家に配布されており、全農と担い手をつなぐコミュニケーションツールとして、活用が期待されています。今後とも、担い手向け

全農耕種総合対策部が発行する営農技術情報誌『グリーンレポート』は、令和元年度6月号で記念すべき600号を迎えました。昭和60年（1985年）9月1日の創刊以降、毎月継続して発行しています。

『グリーンレポート』の概要

創刊：昭和60(1985)年9月1日
 発行頻度：毎月1日発行(年間12回)
 発行部数：7万2500部(令和元年5月現在)
 配布先：担い手、JA、県連・県本部、農業試験場・農業改良普及センターなど

情報誌としてのさらなる機能強化を図るため、農業生産と農業経営に役立つ情報発信を目指して発行していきますので、引き続きご愛読のほどよろしくお願います。

「グリーンレポート」に関するお問い合わせ先 耕種総合対策部アグリ情報室 ☎03-6271-8278

JA Zenroh Weekly

ニュース&トピックス

岩手、宮城のマラソン大会で焼き餅配布

国産もち米のパネル展示も行いPR

米穀部



国産もち米に関するパネル展示に見入る家族(宮城県)



好評だった焼き餅の配布(岩手県)

全農は5月にもち米主産県の岩手と宮城で開かれたマラソン大会で、焼き餅の試食配布と国産もち米に関するパネル展示を行いました。

宮城県で12日に開かれた「第29回仙台国際ハーフマラソン」には、昨年に引き続き出展しました。

当日は、約1万3000人のランナーが杜の都を疾

走する中、マラソンゴール地点で地元産「みやこがねもち」を使用した5000個の焼き餅と2000個のおこわおにぎりを配布。長い列ができる中、予定時間内に全量配布を終えました。

一方、岩手県で19日に開かれた「2019スポニチいわて奥州きらめきマラソン」にも昨年に引き続き出展しました。

約5000人のランナーが奥州路を疾走する中、2500個の焼き餅をランナーや応援に来ていた友人・家族に配布。国産もち米PRの絶好の場となりました。全農は今後もマラソン大会などの試食配布やPR活動を通じて、国産もち米の消費拡大への取り組みを強化していきます。

全自動で空中散布するドローンに高い関心

土づくりのためのわらすき込みや省力化でTACスキルアップ研修会

福岡県本部



高い関心を集めたドローンの実演



研修会は、土づくりのためのわらすき込みや省力化のための新技術研修として、JAグループ福岡担い手・営農サポートセンター、JA筑前あさくら、福岡県本部農業機械課と農機メーカーの連携で実現しました。当日は、福岡県内JA、福岡県本部、JA福岡中央会、福岡県普及センター、農機

JAグループ福岡担い手・営農サポートセンターは5月28日、JA筑前あさくらと同JA管内圃場^{ほじょう}で、TACスキルアップ研修会を行いました。



JA筑前あさくらでドローンとわらすき込みの座学研修

メーカー関係者約70人が参加し、ドローンとわらすき込みの座学研修を行った後、圃場で実演会を行いました。ドローンについては、手動ドローンと全自動ドローン計3機種の実演が行われ、特に全自動で空中散布が完了する「ナイルワークスドローン」については、スマート農業による省力化の最先端技術として参加者の関心も高く、多くの質問が寄せられていました。

「食農応援」、「田んぼの生きもの調査」ツイッター開始

フォロー・いいね・シェアをお願いします

広報・調査部

「全農広報部 食農応援」 ツイッター

食農教育と国産農畜産物の消費の拡大を目的に、全農が協賛する全農親子農業体験ツアーや、料理教室などの様子を発信していきます。



「全農広報部 田んぼの生きもの調査」 ツイッター

田んぼを通じた環境教育を目的に、全農が協賛する「田んぼの生きもの調査」の様子や、全国の田んぼの生きもの調査参加者の投稿情報などを発信していきます。



広報・調査部は食農応援と田んぼの生きもの調査の取り組みを紹介するツイッターアカウントの運用を新たに始めました。これで広報・調査部が運営するツイッターは先行する「全農広報部 スポーツ応援」を含め三つとなります。ぜひ各ペー^ジへのフォロー・いいね・シェアなどをお願いします。

「スポーツ応援」
ツイッターは
こちらから



労働力支援、共同購入

トラクターが農業白書に

産地課題への挑戦「事例」で紹介



農水省がまとめた「平成30年度食料・農業・農村白書」に、全農の労働力支援や大型トラクターの共同購入の取り組みが掲載されました。それぞれ、農業経営者の一番の課題である労働力不足に対応する事例、また、農業者を支える農業関連組織の新たな取り組みの事例として、紹介されています。

【大分県本部、耕種資材部】

大分県本部では、労働力人口の減少や農業就業者の高齢化・減少に伴う労働力不足が問題となる中、パートナー企業と連携し、青果物の収穫などの作業受託による労働力支援を行っています。また、就農を希望する方に、労働力支援事業に参加してもらったことで、新規就農者を育成する取り組みともなっています。

これらの取り組みが評価され、このたび、農業白書に掲載されることになりました。

耕種資材部では、生産者の声を反映した大型トラクター(60馬力クラス)の共同購入に取り組みんでいます。生産者の意見を聴いて必要な機能を絞り込み、全国の生産者に結集を呼び掛けて積み上

「平成30年度食料・農業・農村白書」

本文と概要は、こちらから



事例

必要なときに必要なだけの労働力を供給できる仕組みの構築 (大分県)

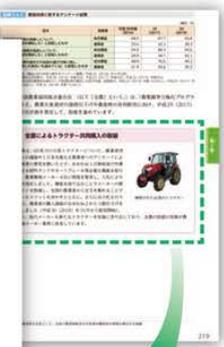
JA全農おおいたは株式会社菜果野アグリと連携し、組合員に対する労働力支援を行っています。支援要請のあった組合員に対し、大分市や別府市等の県内都市部から集まった支援者を送り出すというこの取組は、平成30(2018)年には延べ1万8千人の支援にまで拡大しました。

労働力を安定して確保するためには、年間を通じて一定量の仕事を用意し、支援者をつなぎとめておかなければなりません。そこで農閑期である冬にキャベツを作物として取り入れたところ、一定の作業量を創出できると同時に生産者の所得上昇にもつながる結果となりました。

JA全農おおいたの花木園芸部直販課長は、「准組合員を始めとした関係人口=幅広い支援者は地域の消費者でもある。生産の支援をすること、国産農産物を購入して食べることの両方で地域の農業を支えてほしい」と話し、今後は支援者の中から新規就農者を育成することにも取り組んでいくこととしています。



キャベツを収穫中の支援者の皆さん



大分県本部の労働力支援の取り組み事例(154ページ)

事例

全農によるトラクター共同購入の取組

全農は、60馬力の大型トラクターについて、農業者団体等との議論や1万名を超える農業者へのアンケートにより農業者の意見を聴いた上で、おおむね1日無給油で作業ができる燃料タンクやオートブレーキ等必要な機能を絞り込み、農業機械メーカー4社に開発を要求し、入札により1社を指定しました。機能を絞り込むことでメーカーの製造コストを削減し、全国の農業者から注文を集めることでスケールメリットを活かすとともに、さらには入札を行うことで、農業者の購入価格のおおむね2から3割引下げを実現しました(平成30(2018)年10月から販売開始)。

また、他のメーカーも新たなトラクターを安価に売り出しており、全農の取組の効果が農業機械メーカー業界に波及しています。



開発された60馬力トラクター

大型トラクターの共同購入の取り組み事例(219ページ)

全国初

地元JAと全農が共同の直売所オープン

「とれたて元気市 となりの農家店」

「拠点型事業の一体運営」・「自己改革の現場での実践」

広島県本部とJA広島中央が共同運営する農産物直売所「とれたて元気市となりの農家店」が5月24日、東広島市にグランドオープンしました。オープン初日は、約2000人が来店され店内は大にぎわいとなりました。【広島県本部】



開店と同時に多くのお客さまでにぎわう「とれたて元気市 となりの農家店」



グランドオープンした「とれたて元気市となりの農家店」



5月24日のオープニングセレモニーに出席した水永祐治県本部長（左）、JA広島中央の河野孝行代表理事組合長（中央）、全農の久保田治己常務理事。オープン初日にぎわう店内を回った

単位JAと全農との「協同事業体方式」に基づく、直売所の共同運営は全国でも初めての試みです。都市近郊で購買力のある同市への出店で、農業者の所得増大につなげていきます。JA域を越えた大型店の開設で、販売力を高めて生産基盤の強化を図ると共に、地産地消を推進し、豊かな地域社会づくりに取り組みます。

県内JAの直売所では最大級の規模で、JA管内の農畜産物だけでなく、県産の農畜産物や加工品を提供します。瀬戸内海を中心に国産の魚介類、県産和牛の「ひろしま牛」、飼料に米をブレンドして育てた県産豚の「お米(マイ)ポーク」などを対面方式で量り売りする精肉、店内の野菜や県産・国産原材料を中心に使用する惣菜コーナーなどがあります。

初年度(約10か月間)の売上高は5億円が目標。2024

年度には10億円を目指していきます。

水永祐治県本部長は「JAと共同運営の産直市の展開で、さらなる農業者の所得増大、地域活性化を図りたい」と力強く語ります。

「とれたて元気市 となりの農家店」店舗概要

- 住所:広島県東広島市西条町寺家7957-1
- TEL:082-437-5831 ●FAX:082-437-5832
- 営業時間:9:00~18:00
- 定休日:なし(盆・年末年始は休業の場合あり)
- アクセス:山陽自動車道西条ICから3.5km、車で約10分
- 売り場面積:934㎡(外売り場含む)
- 取扱品目:野菜、果物、精肉、鮮魚、惣菜、花き、加工品、米、卵



産地と消費地が近いこと生かし

「なまはげ」ブランドで活性化

JA秋田なまはげは秋田県の沿岸中央部に位置する秋田市、男鹿市、潟上市天王地区がエリアです。

スーパーにJAコーナー 地場産野菜のPR強化

JAは平成30年7月に株式会社あきたベジフルサ



管内スーパーの「JA秋田なまはげ」コーナー

ポートと協定を結び、「なまはげの畑」応援プロジェクト事業を始めました。管内のスーパーにJAのコーナーを設け、専用POPと共に管内産の農産物をまとめて陳列。管内消費者への地場産品のPRを強化し、地産地消の拡大と販売額の向上につなげています。

エダマメが初の1億円達成 新鮮な「朝採り」が好評

農村部と消費地が近いことを生かし、早朝に収穫した



JAマークの「竿燈」を掲げる職員

エダマメをその日のうちに小売店の店頭と並べて限定販売する「今朝採りたての枝豆」事業にも取り組んでいきます。鮮度が命のエダマメを新鮮なうちに食卓に届けることができるため、消費者からは味や香りがいいと好評。管内各地のスーパーでは、売切れが相次ぐほどです。

JAでは農家の負担軽減と作業効率の向上のため、共同選果施設を整備。エダマメの栽培は徐々に拡大し、平成30年10月には販売額が

JA秋田なまはげ (秋田県)



1億円を超えました。管内では販売額が1億円を超える品目が徐々に増え、JAはさらなる生産振興に励んでいます。

JA職員が地域行事へ積極的に参加し活性化

東北三大夏祭りの「秋田竿燈まつり」など、管内の行事にJA職員が積極的に参加しています。また、地元住民や観光客が多く訪れる秋田市中心部の「あぐりんなかいち」などJAの農産物直売所では、「秋田竿燈まつり」や花火行事「千秋花火」などのイベントに合わせてさまざまなキャンペーンを展開し、地域のさらなる活性化を図っています。

昨年夏に県立金足農業高



金足農高の渡辺勉校長(右から2人目)へ米を贈る京極芳郎組合長(右端)

校が夏の甲子園秋田代表に決定した際には、JAが管内産の「あきたこまち」100キと特産の「わかみメロン」50人分を贈呈。同校野球部を激励しました。JAはこれからも都市農村の食を支えると共に、農業による地域振興に努めていきます。

概要	平成31年3月31日現在
正組合員数	9172人
准組合員数	1万2767人
職員数	454人
販売品取扱高	83億1千万円
購買品取扱高	39億8千万円
貯金残高	1340億3千万円
長期共済保有高	3319億3千万円
主な農産物	米、大豆、菊、ダリア、エダマメ、ネギ、和梨、メロン

[青果情勢]

(園芸部)



野菜

関東や準高冷地が出荷の中心

概況

6月は、出荷の中心が関東から東北・高冷地に切り替わっていく時期となります。

キャベツは、千葉・愛知が終盤を迎え、群馬や茨城が出荷の中心となります。群馬や茨城は前年が大幅に生育前進していましたが、今年は平年並みの出荷量となる見込みです。

ハクサイは、茨城から長野などに切り替わります。茨城が終盤を迎え、後続の長野・群馬はやや生育が遅れており昨年をやや下回る出荷見込みです。6月下旬にはまとまった出荷量となってくるでしょう。

レタスは長野と群馬が中心の出荷となります。茨城・九州の切り上がりは早まっております。長野・群馬は適度な降雨のため品質良好で生育順調です。6月の出荷量は豊作だった前年並みを見込みます。

ダイコンは、千葉などから青森・北海道に切り替わります。千葉産は平年よりも早く切り上がりとなりますが、後続の青森は4月の冷え込みから生育遅れがみられます。出荷量は端境から前年よりやや少ないものの、平年並みの出荷量となる見込みです。

ニンジン、千葉などから青森と北海道に切り替わります。千葉は前進傾向であるものの、太りも良く生育は良好。青森と北海道も平年並みの作柄を見込むため、前年並みの出荷量を見込みます。

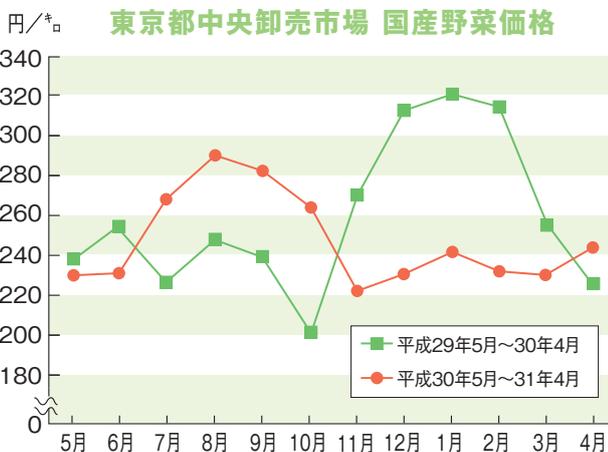
トマトは西南暖地が終盤を迎え、関東・東北産地からの出荷が中心となります。西南暖地は樹勢良く、終盤ですが潤沢な出荷見込みです。今年は前年をやや上回る出荷量となる見込みです。

キュウリは、関東産地から東北産地中心の出荷に切り替わります。東北産は無加温作の増加から、6月は昨年をやや上回る見込みです。出荷量は好天により豊作であった前年並みを見込みます。

ナスは、高知や九州産地が中心の出荷となります。西南暖地からの出荷は前進傾向となり、関東産は月末から増量となるでしょう。出荷量は前年並みを見込みます。

店頭

キャベツ、レタスなどの春物野菜中心の売り場構成になっています。気温の上昇に伴い、サラダ商材の売り場も拡大しています。



果実

夏の果実が本格化

概況

6月は、スイカ、メロンなどのウリ類に加えて、ハウスミカン、ピワ、オウトウ、桃、ブドウなど、夏果実の出荷が本格化し、国産果実の品目数が増えてくる時期となります。

スイカは、千葉・熊本・鳥取などが中心の出荷となります。熊本産は前進出荷傾向でしたが、千葉・鳥取産はやや遅い生育となっています。肥大は良好で、出荷量は前年並みかやや少ない見込みです。

メロンは、茨城・千葉など関東産が中心の出荷となります。各品種とも肥大は良好で、栽培面積は減少傾向ですが、出荷量はおおむね前年並みを見込みます。

ハウスミカンは、佐賀・愛知などが中心の出荷となります。生育は順調で、出荷量は前年並みの見込みです。

オウトウは、山形が中心の出荷となります。生育は前年より遅れており、「佐藤錦」は6月10日頃から、「紅秀峰」は月末から出荷が始まる見込みです。出荷量は前年をやや下回る見込みです。

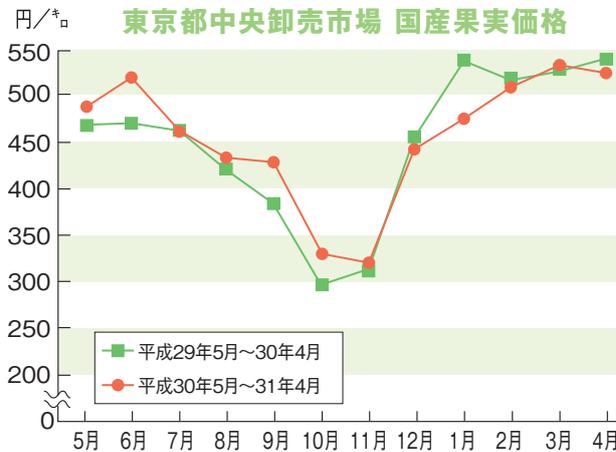
ピワは、長崎・千葉が中心の出荷となります。主産地の長崎が前進出荷傾向により5月が出荷のピークとなったため、6月は前年を下回る出荷量となる見込みです。

桃は、山梨が中心の出荷となります。生育は前年よりやや遅れており、ハウス物が中旬くらいまで出回り、その後露地物の極早生品種の出荷が始まる見込みです。6月の出荷量は前年を下回る見込みです。

ブドウ類は、「デラウェア」が中心の出荷となります。島根・山梨・大阪の出荷は順調で山形も生育は遅れ気味ですが下旬から出荷開始となります。ハウス物は「シャインマスカット」の生産量は昨年より増加、「巨峰」や「ピオーネ」は減少傾向となっています。ブドウ全体の出荷量はおおむね前年並みを見込みます。

店頭

国産果実の品目数が増えてくる時期ということもあり、売り場も華やかになってきます。週替わりで、さまざまな品目の催事・セールが行われます。



主産県 だより

5月は、トマト・ミニトマト、レタス、イチゴ、ブロッコリー、夏秋ピーマンの主産県が一堂に会し、作況見通しや販売対策の共有化、消費拡大の進め方について協議しました。今後も主産県による情報交換会などを定期的開催し、出荷情報や販売情報の共有を図ります。

県内4JAと初の共同開発

神奈川県産農産物を使用した 5種類のようにかん新発売

【神奈川県本部】

神奈川県本部は、新商品「かながわづくし 彩りようかん」の販売をゴールデンウィークから順次開始しました。

県内4JA(かながわ西湘・よこすか葉山・湘南・いせはら)と連携し商品開発したもので、各JAの特産農産物である「湘南ゴールド」「くりまさり」「こだわりかぼちゃ」「伊勢原ぶどう」「足柄茶」の果汁やピューレをふんだんに使用した5種類のようにかんがセットになっています。

商品開発を担当した県本部のプロジェクト推進課はこれまで、規格外品などの新たな活用に取り組んできましたが、複数のJAと協力して一つの商品を開発するのは今回が初の試みで、県産農産物のブランド力や認知度の向上につながることを期待します。

担当者は「今後もJAと一体となって県産農産物を生かした商品開発に取り組んでいきたい」と意気込みを見せています。

参考売価は1080円(税込み)。県内各JA直売所などで購入できます。



県内4JAと初の共同開発で誕生した「かながわづくし 彩りようかん」
1本55gと食べ切りやすいサイズに仕上げました

JA全農 オフィシャル アプリ

トピックス ポイント ケーボン

「食と農」の情報を広く消費者へ!
スマホアプリを公開中

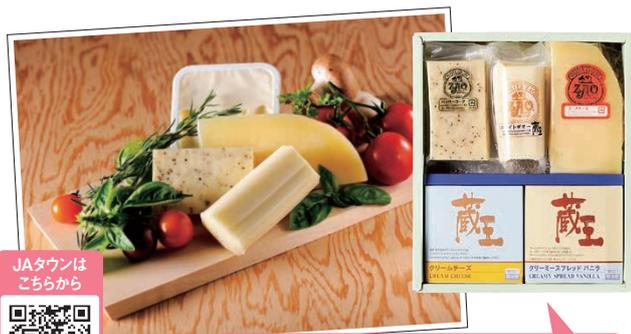
JA全農のイベントや新商品に関する最新情報がさらに充実!
作動環境: スマートフォン iOS8以上 Android4.3以上



JAタウン ショップ紹介

JAタウン | 検索 クリック

蔵王酪農センター (宮城県)



JAタウンは
こちらから



蔵王チーズ詰合せ(5個入り).....3742円

ご紹介するのは、宮城県の蔵王山麓の新鮮な生乳から造られるナチュラルチーズです。

蔵王チーズの中でも人気のクリームチーズとおつまみに最適な熟成チーズを組み合わせました。クリーミーブレッドバニラは、クリームチーズにバニラビーンズを入れて甘く仕上げたスイーツのようなおいしさです。

蔵王酪農センターは、蔵王連峰の麓、宮城県蔵王町で酪農と乳製品の製造をしています。牧場には130頭ほどの乳牛がいて、毎日生乳の生産を行っています。チーズ工場では「蔵王チーズ」のブランドでナチュラルチーズを中心にいろいろな乳製品を製造しており、ナチュラルチーズに関しては、地域ブランドの国産ナチュラルチーズの先駆けとして約40年の歴史を持っています。

ご自宅用やギフトにぜひ、ご利用ください。

JA全農のインターネット ▶ご注文は <http://www.ja-town.com>
ショッピングモール ▶お問い合わせは shop@ja-town1.com

※本誌を通じていただいた注文などで取得した個人情報は、商品等の発送にのみ使用します。